

棚瀬襄爾君の思い出

堀 一郎

1

棚瀬君の訃報ほど、私を驚かせ、嘆かせたことはありません。この日からまだ1ヵ月とは溯らない11月14日に、私は彼と東大の山上会議所で久々に話して、元気に別れたばかりだったからです。長いマレーシアの調査旅行から帰国した直後だとのことでしたが、「疲れたよ」とは云っていたが、いつもと変らぬ血色のよい顔からは、すでにしのびよっていたかも知れぬ死の影など、感じよう筈もなかったのです。

奥さんからのおたよりでは、棚瀬君は前の晩まで宗派関係の講習会で活躍していたということです。同じ宗教学者の岸本英夫さんは、悪性な癌の発病から奇蹟的な、しかし10年の間の苦しい死との対決の日々を送ったのに、その岸本さんの去った同じ年に、死をみつめるどころか、予感さえ、恐らくその直前までなかったろう棚瀬君の急死は、残された宗教学者に投げつけた運命の皮肉な詰問といったものを感じずにはいられません。棚瀬君の恩師であった宇野円空先生も、東大退官後の元日に、やはり同じような心臓発作で斃れられました。文字通り学問的に師の遺鉢をついだ彼が、同じ急死を遂げたということも、何か因縁めいたことに思われます。

2

私が棚瀬君と知り合ったのは、彼が東大へ入ってきた直後の、たしか昭和6、7年頃からと

記憶しています。きのうのことのようにも思い、またずいぶん遙かな思い出でもあります。この当時も彼は血色のよい、元気な、そしてなかなかうまい論客でした。しかし私が彼と一番頻繁な交際を持ったのは、お互に大学は出たけれども、何になるのやら、なれるのやら、お先真暗な一時期から、終戦直後までのことです。

すでに満州事変が勃発し、硝煙と血のにおいが次第に立ちこめてくる頃、二人は松谷さんのやっておられた日本文化協会の研究生として、毎週1回の研究会に顔をあわせることになりました。この協会には故紀平正美先生が顧問に、今の東北大学の石津学長が指導研究員として参加しておられました。私は今もあの2・26事件の当夜、大雪の中を定例研究会に、当時日比谷の公会堂裏にあった協会へ出かけ、物々しい周囲の状況に気をのまれながら、いろいろ日本の前途を語り合ったことを覚えています。たしかその頃、彼はラドクリフ・ブラウンの名著『アンダマン島民』を逸早く読破して、研究発表したことも覚えています。

3

私は生来、多少おっちょこちょいなところがあり、また自分の進むべき方向への確信も得られぬまま、いろいろと学問上でも遍歴を重ねましたが、棚瀬君は私と違って、宇野先生というよい伯楽の下で、どんな状況の下でも自己のペースを決して変えようとはしませんでした。彼は実に終始一貫して、宗教民族学に専念し、且つ多くの当時の批判にもめげず、これを深く掘り下げて行こうとしたのは、今にして想えば大したものだったと思います。そして彼はこの頃ファーザー・シュミットに傾倒し、文化圈説や文化史学派の紹介や研究を発表したことは、皆さんのよく知られるところです。これはのちに『宗教文化史学序説』（青山書院）として昭和23年に出版されました。



現地における棚瀬博士

同じ頃、今は北海道学芸大学にいる野辺地東洋君と3人で、月に一度位、3人の家をまわり番で、雑談兼研究会をやったことがあります。それで何度か棚瀬君の家庭を襲ったこともありましたが、そのとき私が深く心を打たれたのは、彼の机の脇に置かれた大きなカード・ボックスでした。彼は一つ一つの曳出しに見出しをつけて、読破した多数の書物からの引用カードを見事に整理していたからです。『金枝篇』をはじめ膨大な著述を残したフレイザー卿は、すぐれた助手と、驚くべく整備されたカードシステムを持ったということですが、私は心中ひそかに、やがては彼が日本のフレイザーになるのかと、一面感歎するとともに、他面ひそかな恐怖と焦りを感じたものでした。このカード・ボックスから、彼は大战中二度の応召という最悪の事態のなかで、昭和16年、『民族宗教の研究』（畠傍書房）を、また19年に『東亜の民族と宗教』（河出書房）の二著を相ついで出版するにいたったのです。前著の中に入れられた、宗教民族学の文献目録は、一般と分類項目による68頁に及ぶもので、彼の努力の並々でなかったことを物語っています。後の著書は、棚瀬君がすでに中支に出征したあと、戦塵の中を原稿を携えて推敲を重ねたものでした。この出版には宇野

先生が骨を折られ、私も少しお手伝いしたので、印象に残るものです。今いろいろ思いもよらぬ文を書かねばならぬので、久々に書架から取出して見返していますが、所々折ったところ、紙をはさんだのがすでに黄ばんでいたりして、私が彼の著書から多くのことを学んだことを語っています。本の扉に、彼の筆蹟で「中支、隼、第9899部隊」と書かれているのも感慨無量です。

4

この当時棚瀬君は東亜研究所の所員で、そこでの研究は纏められて、昭和17年、同研究所から『比律賓の民族』として出版されていました。私は当時こんなすぐれた研究者を、こともあろうに中支あたりの看護兵として、アミーバ赤痢などの患者の世話をさせておく陸軍の不見識さに憤慨して、この書物を持って、遠い親戚のさる将官のところへねじ込んだことがあります。この人は私の話をよく諒解はしてくれましたが、すまなそうな顔をして、棚瀬さんが将校なら何とでもできるが、実は兵卒は名簿さえ大本営に持っていない状態だから、と結局どうにもならぬことを説明してくれました。私はなおも即時除隊にすべきだなどと駄々をこねて、こうしたすぐれた研究者の意見こそ、現地で活用すべきだと主張したのですが、幸か不幸か、この画策は実を結びませんでした。うまくいかなかったことは、しかし、結果として棚瀬君の命を救ったようなものでした。当時フィリピンの文化工作に挺身していた京都大学の吉田三郎君は、マニラの市街戦で、その若い、可能性に富んだ生命を絶ってしまったのです。聞くところによると、看護兵ながら、理解のある隊長がいて、棚瀬君は割合自由な研究や読書の時間も持っていたようでした。

5

長い出征から引揚げてきた棚瀬君との交渉

は、またしばらく同じ東京で、彼が京都へ、私が仙台へと別れ別れになるまでつづきました。しかしこの時は、お互に食えること着ることに勢一杯でしたし、どちらも生活の本拠を失ってしまつて振出しに戻つたような暗澹たる状態でした。そして彼はこうした中から意欲的な研究を発表していったのです。先にあげた『宗教文化史学序説』もその一つですし、『宗教研究』その他にこの頃矢つぎ早やにラディンやワッハの学説についての論文や評論を発表したものです。彼の実に五年有余にのぼる外地での拘束された生活にもかかわらず、こうした学問の意欲を絶えず燃やしつづけて挫折しなかった、その意志力には、一度応召はしたが即日帰郷を命ぜられて、内地で右往左往していた私には、本当に頭のさがる思いだったし、同時にいつか彼にはコンプレックスを感じさせられてきたものです。

よい意味でのライバルであつた棚瀬君は、ときどき辛辣なことをいって、人の心肝を寒からしめることもあつて、私は自分の領分をはみ出して、民族学的な方面のことを口にしたりするとき、いつも棚瀬君の顔が頭に浮んで、またあいつに何かいわれはしないかと、心の奥に一種のわだかまりを感じてもきたものです。

彼が今、急にいなくなってしまうと、私はある意味で、何だか目標を失つた、心の張りのなくなつてしまつた、空虚さに襲われています。私は靈魂の存在を信じませんから、彼の靈がどうこうとも、それにどうしようとも考えませんが、棚瀬君の無言の批判が、いつも私の仕事の進みの上に、反省と鞭撻の役割を果たして、生きていたときよりは却つて始末のわるい存在に化したような気さえします。彼が私の上に及した影響や感化は、私の今後の生涯について離れないことでしょう。彼は私の上にも生きています。善友とはこういうものだったのかと、別れて後に一しお身にしむ次第です。杉浦君といい棚瀬君といい、宗教学と民族学の橋渡しをしてきた2人の俊才を失つたことは、本当に不幸なことでした。(1965. 1. 22)

東南アジア研究センター

と棚瀬幹事

本 岡 武

昭和39年12月10日、東南アジア研究センター・バンコック連絡事務所で、夕食後雑談をしていたとき、岩村所長から棚瀬幹事急逝の旨の電報がはいつた。まったく愕然たる思いにかられ、暗澹たる気持ちにつきおとされた。その後の詳報で狭心症のため同日午前九時倒れられたことを知つた。思えば10月はじめ、マレーシアから帰られた棚瀬さんと京都の東南アジア研究センター所長室で話しあつたのが、わたしが棚瀬さんとあつた最後だった。これまでの棚瀬さんとの短いが、しかし深い交わりをとめどもなく、つぎつぎ思いだす。

その思い出のうち、棚瀬さんの東南アジア研究センターのための御努力と御功績のほどを、ここに書きとめ、哀悼のしるしとしたい。

もともと、東南アジア研究センターの母体となつたのは、東南アジア研究会である。これは、昭和34年春に、当時の平沢興総長の御意向で東南アジア研究関係者が集まり、その協議にもとづき当時の文学部白井二尚教授が中心になつて組織されたものである。ちょうどそのとき棚瀬さんは竜谷大学教授兼学監から京大文学部に文化人類学担当助教授としてまねかれた。もともと棚瀬さんは、とくに東南アジアの民族を専門領域とされていたので(昭和36年3月に、これをテーマとして文学博士の学位を京大から授与された)、京大へ赴任早々から、発足したばかりの東南アジア研究会の実際上の幹事役をつとめられた。第一回の研究例会が開かれたのは、34年9月であつたが、今日まで70回以上も